

“アメリカ人女性宣教師の異教地報告” 研究序説 — Feminist Historiography of Geography への位置付けとして —

齋藤元子

I はじめに

Domosh¹⁾ (1991a・b) は、ポスト・モダニズムの視点から、Isabella BirdやMary Kingsleyといった19世紀ヴィクトリア期に活動した女性旅行家を事例として、これまで地理学の枠組みから排除されてきた人々の業績を再検討し、地理学史の中に正当に位置付けようとする *feminist historiography of geography*²⁾ の試みを提唱した。この試みは、地理学の領域を拡大し、より包括的な人文地理学の歴史を創出しようとするものである。

女性史から見たヴィクトリア期³⁾における欧米社会の特徴として、女性の行動空間の拡大が挙げられる。その最たるものが海外への旅行と移住であり、キリスト教の海外伝道は移住目的の一つであった (フレス・ペロー 1996: 735-748)。旅行家や宣教師と呼ばれる女性の出現である。

女性旅行家に関しては、*feminist historiography of geography* が実践されているか否か議論の余地はあるものの、今日かなり研究がなされてきているといえよう。特に Isabella Bird については、日本をも旅したため我が国の地理学者も関心を寄せている⁴⁾。一方女性宣教師に関しては、フェミニスト神学やアメリカ女性史の分野で多少研究がなされてはいるが、彼女たちによる異教地についての詳しい記録が残されているにもかかわらず、地理学者からはほとんど注目されていない。

筆者は前稿 (齋藤 1999) において、アメリカ人女性宣教師誕生の背景を示したが、本稿では、Domoshが提唱した *feminist historiography of geography* の実践という意識の下に、アメリカ人女性宣教師の残した異教地報告を地理学的史料として評価することを試みたい。まず始めに *feminist historiography of geography* を概説し、次いでアメリカ人女性宣教師の異教地報告を紹介する。Domoshが事例として取り上げている女性旅

行家と筆者の研究対象とする女性宣教師は、ともにヴィクトリア期という時代に生き、当時の社会規範⁵⁾に縛られ、またそれに挑む形で活動を展開した。したがって、女性旅行家の文脈に関する Domoshの解説は、筆者の研究対象にも概ね当てはまるものである。

II *feminist historiography of geography*⁶⁾

ヴィクトリア期の欧米地理学界は、価値基準に中立で特定の見解に依拠しない客観的科学への傾倒が顕著であった。科学者としての地理学者という地位を授ける大学教育から女性は排除され、地理学会への入会も数人の例外を除いて、女性には許可されなかった。女性旅行家の旅は、科学的学問の進歩を目的として実施される地理学者のフィールドワークとは異なり、地理学に新たな知識を何ももたらさないとみなされた。

女性旅行家は、大学や学会といった組織との関係をもたなかったため、場所の発見を最優先にしない自由な旅が可能であった。ヴィクトリア期の社会規範に縛られて自国では発揮できない能力、つまりは自分の生活を自己管理できる力を証明する土壌を旅は提供した。彼女たちは自己発見を旅の目標としてはっきりと認識し、旅の満足感は地理学上の新しい場所を発見することよりもむしろ、旅のプロセスや自らの意志で参加できる世界を経験することにおいて得られた。したがって、直接経験による知識獲得あるいはユニークな体験といったものを重視したが、このことが彼女たちを専門的な地理学者としての地位から除外する根拠として利用された。つまり彼女たちが重きを置いたフィールドワークの主観性は、科学的学問を標榜する地理学とは相いれないものとして排斥されたのである。

多くの女性旅行家が旅の記録として、事実に基づく旅行記と旅を題材とした小説などを執筆した。

旅行記は地理学界からの評価を期待したものであり、小説などは旅行記で表現し得なかった旅での喜びや驚きを書き残そうとしたものである。旅行記を記すに当たり、地理学界の嗜好する言説の客観性を大いに意識した。「I (私)」という表現を避けるなど主観性を疑われる言語を排除し、科学的な客観性に基づく報告書とみなされるような体裁を整えた。そのような作業は自らのジェンダーを否定し男性と完全に同一化することであったが、男性に限定された言語の中から彼女たちの経験を正当に表現する語彙を見つけだすことは至難の業であった。

女性旅行家が地理学者の範疇から排除された理由を、知識・客観性・言語の3つの言葉をキーワードに、ポスト・モダニズムの視点から考察を試みることは有効である。知識は社会的そしてイデオロギー的に構築されたものであり、それゆえ特定の文脈から切り離すことは不可能である。つまり知識というものは社会関係の偶然性に依存しているの、普遍的真理も普遍化する言説もあり得ないことになる。特定の思想に偏らない知識とされるものは、実は特定の時空間の産物であり、社会状況やジェンダーを含む権力関係を反映し規定している。主体から離れた世界、つまりは抽象化された客観的な世界が存在するという考えは疑問に晒される。我々は世界というものを唯一我々自身の偶発的出来事に対する見解によってのみ研究することが可能だからである。世界を探求することは、比喩、文字通り両方の意味において、観察者として主体の実際の参加を含む。そして言語は観察に形態を与えることによって、その参加を表現し修飾する。その形態は単独の現実を直接に表現するものではなく、ある世界の特定の見方を反映している。価値基準に中立であり特定の見方に依拠しない客観的科学へのヴィクトリア期地理学界の傾倒は、このようなポスト・モダニズムの批判を通して見ると、特定の歴史的な産物であり、男性中心の思考を指し示すものとして見ることができる。

歴史は文脈的であるが故に、ヴィクトリア期女性旅行家による個人的な場所の経験に基づいた知識の主張は、地理学の歴史に容易に適応され得なかった。この理解に立って、彼女たちの業績を再検討することが、*feminist historiography of geography* の実践を意味する。つまりジェンダー

の関係性と表象が知識の社会的構築にとって不可欠なものであるという認識に基づき、地理学の定義を広範囲化することを目指すものである。ヴィクトリア期女性旅行家のみが地理学の歴史から組織的に排除されたグループではない。*feminist historiography of geography* の視点から過去を振り返るならば、数多くの埋もれた史料が発見されることだろう。それらに光を当てることは、より包括的な人文地理学の歴史叙述を可能ならしめるものである。

III アメリカ人女性宣教師の異教地報告

女性宣教師を輩出した女性海外伝道運動⁷⁾は19世紀最大の女性運動であり、世紀末には1200人以上のアメリカ人女性が宣教師として世界各地で異教女性の伝道に携わっていた⁸⁾。ヴィクトリア期のキリスト教界は多くの女性信者を擁してはいたが、組織の中心は地理学界と同様に男性によって占められていた。牧師への就任や教会政治に参画するための選挙権が女性には認められていなかった。このような状況の中で、教会での活動の場を求めていた女性たちは、「女性による女性への伝道」をスローガンに海外の異教地に自分たちの能力を生かせる場所を見いだした。

1) マス・メディアとしての機関誌

各教派に組織された女性海外伝道協会がまず着手したのは、月刊機関誌の発行である⁹⁾。機関誌は運動推進のマス・メディアとして、異教地における伝道活動とアメリカ本国におけるホームベース活動¹⁰⁾を広く知らしめる重要な役割を担った。各機関誌はライバルではなく協力関係を築いた。互いに記事を転載して紙面の充実を図り、自分が所属する教派の機関誌に加えて他教派のものも購読することを女性信者に奨励した (Keller 1981: 261)。したがって購読料はできるだけ安価に押さえる努力がなされた。例えばメソジスト監督派発行の『Heathen Woman's Friend』の年間購読料は30セントだった¹¹⁾。

女性宣教師は一人一人毎月協会へ手紙を書くことが義務づけられていた (小檜山 1992: 146)。その内容は伝道に関するもののみならず、異教地の地理、歴史、文化、社会状況などにわたった。特に異教地の女性と子供の様子は熱心に報告され、

それらは機関誌を通して広く会員に伝えられた。Domoshが検証した女性旅行家は、地理学界を意識した報告書を記す際、主観的表現を排除し男性との同質性を強調したが、女性海外伝道運動は女性の独自性を武器に、運動の正当性をキリスト教界に認めさせた。ゆえに、機関誌の編集方針にも女性宣教師の報告にもそれが反映されている（図1）。

長老派発行の『Woman's Work for Woman』は毎月特集する国を決め、その国の歴史地理、生活習慣、女性の地位などを詳しく報じた。ちなみに日本は毎年9月号に特集され、それをテキストにして、アメリカ各地で催される女性海外伝道協会の集会の場で「日本の女性」といった課題の勉強会がもたれた（小檜山 1992: 111）。またメソジスト監督派は異教地における具体的な伝道プロジェクト（例えば学校や病院の建設）の支援を各地の支部に割り当てることにより参加意識を促進させ（Hill 1981: 147）、機関誌『Heathen Woman's Friend』などを通じて自分たちが関わっている伝道地の状況を把握するよう会員に求めた。このように、女性海外伝道運動に参加することは、異教地について学ぶことを意味したといっても過言ではない。



Vol. XVI. NOVEMBER, 1884. No. 5.



図1 日本の女性を描いた『Heathen Woman's Friend』の表紙（青山学院資料センター所蔵『Heathen Woman's Friend』1884年11月号より）

異教地に対する理解を助けるために地図も活用された。1869年メソジスト監督派第一号の女性宣教師としてインドに赴任した Isabella Thoburn は、インドの伝道地を自ら地図に表し、それぞれの伝道地や大都市との位置関係を明らかにした（図2）。この地図は1871年7月号の『Heathen Woman's Friend』に掲載されたが、同誌における初めての地図の登場であった（Baker 1896: 74）¹²⁾。これ以降、「maps of our mission fields」といった地図帳やアメリカ各地での勉強会で使用する壁地図などがかなりの予算を投じて作成されるようになる（Baker 1896: 77, 79）。

2) 女性宣教師と地理教育

女性海外伝道協会による広報活動のもう一つの特徴として、子供に注目した点が挙げられる。女性宣教師も子供に宛てた絵入りの書簡を数多く書き送っている。当初女性海外伝道協会は機関誌の中に子供のコーナーを設けていたが、やがて各教派とも子供向けの機関誌を別に発行するようになる¹³⁾。女性海外伝道運動にとって、子供は二つの意味において重要な存在であった。一つは、女性海外伝道協会は女性組織であるがゆえに大口の寄付が期待できず、子供による少額の献金も貴重だったからである。もう一つは、運動を継続させて行くために子供を宣教師の予備軍と位置付け¹⁴⁾、海外伝道に対する関心を呼び起こそうする狙いがあったからである。後者に関しては、後の第一次世界大戦後、各女性海外伝道協会（女性協会）はそれぞれの教派の海外伝道協会（親協会）¹⁵⁾に吸収合併され、子供に対する特別な注意が失われ、宣教師予備軍の形成力が弱体化したことが一因となって、アメリカにおける海外伝道熱は冷める結果となったといわれる（小檜山 1992: 297）ほど、狙いは功を奏した。子供の予約購読者を増やすために、仲間を数名集めた子供にはバインダーや星型のバッジを進呈する（小檜山 1992: 110）といったアイデアも取り入れられた。1890年に創刊されたメソジスト監督派の子供向け機関誌『Heathen Children's Friend』の年間購読料は15セントであったが¹⁶⁾、10部以上まとめて申し込んだ場合は10セントに割り引かれた（Baker 1896: 89）。

女性宣教師は教師経験のある者が多かった¹⁷⁾ので、子供の興味を引きそうなトピックを選んでおもしろい読み物に仕上げることは得意とする

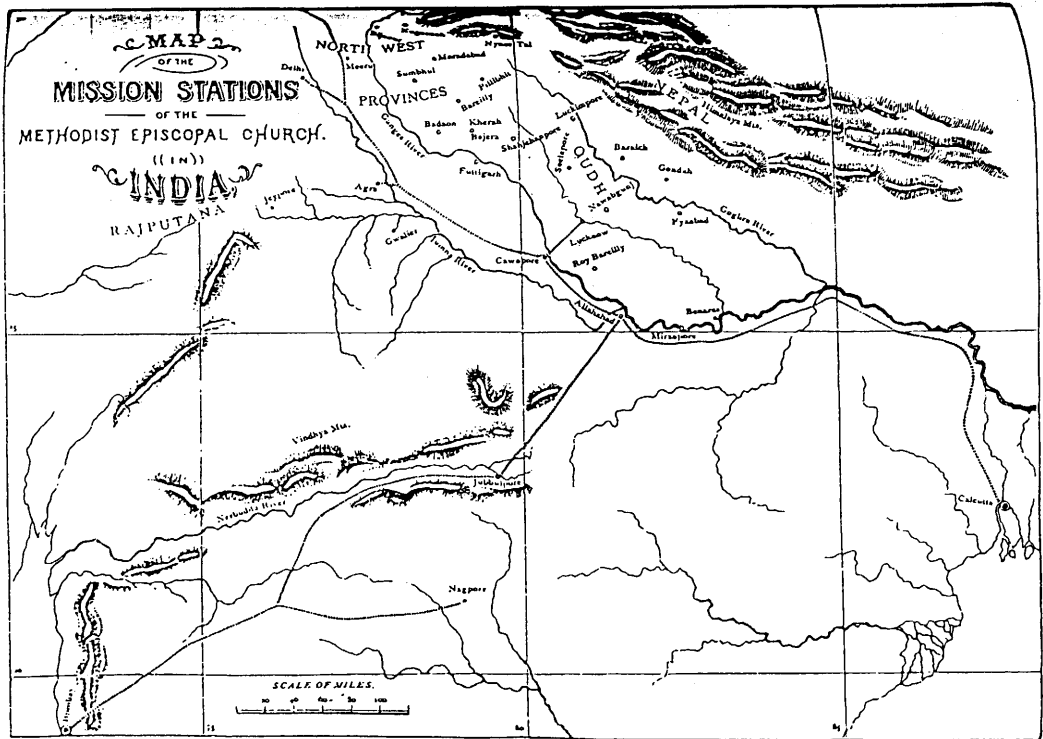


図2 Isabella Thoburnが描いたインドの伝道地地図 (Baker 1896: 74より)

ころであったろう。19世紀後半はアメリカ北部のほとんどの州で初等教育が義務化され、地理はコア科目として重視されていた。1880年シカゴ近郊市の教育長であったFrancis F. Parkerは『地理学習法 (How to Study Geography)』を著し、直観主義的、経験主義的な地理教育を提唱した。地理学習を中心教材 (コア) とした中心統合的カリキュラムを試みるものであり、その影響は全米に及んだが、特に中西部に著しかった (世界教育史研究会 1975: 229)。中西部は最も多くの女性宣教師を輩出した地域であった。地理の学習が奨励されるなか、子供向け機関誌に掲載されている外国の話は、世界地理を自然に学ぶ機会を提供したといえる。また教育現場の教師にとっても、先輩にあたる女性宣教師の伝える海外の情報は格好の教材となり、大いに利用された可能性が高い。メソジスト監督派では、同派が運営する大学、セミナーの中で女性の入学を認めているところすべてに『Heathen Woman's Friend』を一部ずつ寄贈していた (Baker 1896: 75)。家庭においても母親が機関誌の記事を子供に読み聞かせるといったこ

とがなされたと想定できる。19世紀末までに女性海外伝道運動に参加したアメリカ人女性の数は50万人とも60万人ともいわれているが、彼女たちとその子供らが何らかの形で機関誌に接していたと考えられるので、女性宣教師の異教地報告は非常に多くの読者を得ていたことは間違いない。

3) 女性宣教師と日本

アメリカの女性海外伝道協会による日本への女性宣教師派遣が開始されたのは1870年以降であり、中国・インドなどでの実績を踏まえての着手であった。女性海外伝道協会の中で最大の会員を擁していたメソジスト監督派は、1874年から1895年の約20年間に50名の女性宣教師を日本に送り出した。彼女たちが在住した場所は、東京、横浜、長崎、福岡、米沢、名古屋、函館、仙台、弘前、鹿児島と日本各地に広がり、50名のうち途中で職を辞した者はわずか5名であった (Baker 1896: 428-9)。冒頭でも述べたように、海外伝道は移住の一形態であり、実際に多くの女性宣教師が日本という伝道地でその生涯を終えた。

幕末・明治初期の外国人による日本観察記について、渡辺（1998：317）は Isabella Bird の『Unbeaten Tracks in Japan』と Alice Bacon¹⁸⁾ の『Japanese Girls and Women』をその双璧に挙げ、「女性はこまやかな観察能力と現実感覚の点では、もともと男性より優れているという感想を抱かせる」と述べている。女性宣教師の異教地報告は書籍として出版はされなかったけれども、機関誌に膨大な記録が残されており、両者と肩を並べるほどの豊かな内容を持っている。また女性海外伝道運動の規模からみて、両者に劣らない読者を本国で得ていたと推測できる。女性宣教師の在日年数の長さ、日本の各地から報告を書き送っていること、異教女性への伝道という問題意識などは、外国人による日本観察記の研究や書き手が女性であることの特異性に関する議論をより実りあるものにするに違いない。さらには Isabella Bird などの旅行家とは異なる観察眼が認められるかを検証することも興味深いテーマである。

IV おわりに——今後の展開に向けて——

女性宣教師は女性旅行家とは異なり、地理学界との直接の交流や接点はなかった。しかし、以上述べたように、異教地に関する情報を伝達するという形で、地理学的知識の普及に貢献したとみなすことができよう。これは Domosh が feminist historiography of geography の提唱の中で掲げた「地理学の定義の広範囲化」の実践である。女性海外伝道協会の機関誌は、アメリカのフェミニスト神学者やフェミニスト歴史学者らにより教会史、女性史の史料として注目されつつあるが、同誌はまた Domosh の掲げる「より包括的な人文地理学の歴史叙述」を可能にする史料でもある。特に女性と地理学の関係を再考する際、海外伝道という運動を媒介にして、地理学的知識が女性から女性に伝授されるというユニークな現象を認めることができる。これには、本稿では触れなかったが、女性宣教師が異教地に女学校を設立し、そこにおいて異教女性に地理を学ばせた（地理は読み書き算術に次いで習得すべき科目に位置した）（Kell 1980：90）という事実も含まれる¹⁹⁾。Domosh が明らかにしたヴィクトリア期の男性を中心にした狭いアカデミックな地理学界から少し地理学の範囲を広げてみるだけで、女性と地理学の接点が浮

かび上がってくるのである。

注

- 1) Mona Domosh は assistant professor of geography, College of Liberal Arts, Florida Atlantic University。フェミニスト地理学雑誌『Gender, Place and Culture: a journal of feminist geography』の1994年創刊号より1997年までのエディター、現在は編集委員を務める。19世紀のアメリカ都市における景観とジェンダー、階級、人種アイデンティティとの関係に関心を持ち、著書に『Invented Cities: The Creation of Landscape in Nineteenth-Century New York and Boston』（1996, New Haven, CT: Yale University Press）がある。
- 2) ジョンストン（1999：166）では、「地理学のフェミニスト歴史叙述」と翻訳されているが、本稿では原文通り「feminist historiography of geography」を用いる。
- 3) ヴィクトリア期は、本来はイギリスにおけるヴィクトリア女王の治世（1837年～1901年）の期間を指す言葉であるが、同時代の他の欧米諸国についても今日では用いられている。
- 4) 日本における Isabella Bird 研究の代表的なものとして金坂（1995）が挙げられる。
- 5) ヴィクトリア期の社会規範については、筆者が前稿（齋藤 1999）で論じた「女性の領域」と共通するものであるので、そちらを参照されたい。
- 6) 本章は Domosh（1991a・b）の要約、抜粋により「feminist historiography of geography」を概説する。
- 7) 女性海外伝道運動は始めイギリスに起こった。Isabella Bird もこの運動と深い関わりをもち、伝道旅行と称する旅も幾度かなされた。ちなみにイングランドのパラブリッジにある彼女の生家を示すパネルには、探検家・著述家と並んで宣教師という肩書が刻まれている。（金坂 1995：17）
- 8) アメリカにおける女性海外伝道運動の展開については齋藤（1999）を参照。
- 9) 主要教派の機関誌名は以下の通り。
会衆派『Life and Light』、長老派『Woman's Work for Woman』、メソジスト監督派『Heathen Woman's Friend』、バプテスト派『Helping Hand』、聖公会『Spirit of Missionaries』
- 10) 資金の管理調達、宣教師の採用人事、機関誌発行など。
- 11) 年間購読料をほぼ同じ頃に創刊された一般月刊誌と比較してみると、女性海外伝道協会機関誌の低価格が理解できる。例えば、女性向けファッション誌『Demorest's Monthly Magazine』（1865年創刊）：3ドル、芸術情報誌『The Aldine』（1868年創刊）：1ドル、キリスト教教養誌『The Chautauquan』（1880年創

- 刊) : 1ドル50セント。(Mott 1938: 325, 410, 545)
- 12) Isabella Birdが著作に地図を初めて掲載したのは1873年のサンドイッチ諸島への旅であった(金坂1995: 26)。この事実は、女性旅行家と女性宣教師の地図に対する注目が同じような時期に始まっているという点において興味深い。
- 13) 主要教派の子供向け機関誌名は以下の通り。(Brumberg 1982: 352)
- 会衆派『Mission Dayspring』, 長老派『Children's Work for Children』, メソジスト監督派『Heathen Children's Friend』, バプテテスト派『Little Helpers』
- 14) 「the youngest corps of our great Mission Army—the Little Bearers (我々の偉大な伝道軍のなかの最年少隊—小さな光の使者)」といった表現もなされた。(Baker 1896: 89)
- 15) 女性協会と親協会との関係については齋藤(1999: 35) 参照。
- 16) 当時販売されていた子供向け月刊雑誌の価格をみると、『St. Nicholas』(1873年創刊) : 一部25セント、『Pansy』(1874年創刊) : 年間購読料50セントといったように、女性海外伝道協会発行の子供向け機関誌のほうが低価格であった。(Mott 1938: 177, 501)
- 17) 女性宣教師のバックグラウンドについては齋藤(1999: 36) 参照。
- 18) Alice Baconはアメリカ・コネチカット州出身で、日本人女性初の留学生の一人山川捨松(後の大山捨松)のホームステイ先の末娘であった。1888年に捨松と津田梅子の推薦により華族女学校教師として来日。翌年帰国したが、1900年津田梅子の女子英学塾(後の津田塾大学)の設立のために再来日し、二年間英語などの教育に携わった。日本に関する著作として滞在時の日記を基にした『A Japanese Interior』、日本の女性についての『Japanese Girls and Women』、日本の民話を集めた『Land of the Gods』を出版した。(ベーコン 1994)
- 19) メソジスト監督派より北京に派遣されたAnnie B. Searsは、アメリカの地理の教科書『a School Geography』を現地語に翻訳し教材として用いた。(Baker 1896: 90)
- 文献
- 金坂清則(1995) : 『イザベラ・バード論のための関係資料と基礎的検討』, 旅の文化研究所, 76p.
- 小檜山ルイ(1992) : 『アメリカ婦人宣教師——来日の背景とその影響——』東京大学出版会, 345p.+10.
- 齋藤元子(1999) : 19世紀後半アメリカにおける女性の領域と女性海外伝道運動。お茶の水地理, 40, 33-38.
- ジョンストン, R.J.著, 立岡裕士訳(1999) : 『現代地理学の潮流(下)——戦後の英・米人文地理学説史——』, 地人書房, 404p. Johnston, R.J. (1997) : *Geography and Geographers: Anglo-American Human Geography since 1945*. Edward Arnold.
- 世界教育史研究会編(1975) : 『世界教育史体系17 アメリカ教育史I』, 講談社, 373p.
- フレス, G.・ペロー, M.編, 杉村和子・志賀亮一監訳(1996) : 『女の歴史IV 十九世紀2』, 藤原書店, 992p. Perrot, M. ed. (1991) : *Histoire des femmes en Occident 4, Le XIX^e SIÈCLE*. Plon.
- ベーコン, A.著, 久野明子訳(1994) : 『華族女学校教師が見た明治日本の内側』, 中央公論社, 216p.
- Bacon, A. (1894) : *A Japanese Interior*. Horton Mifflin Co.
- 吉田容子(1996) : 欧米におけるフェミニズム地理学の展開。地理, 69A-4, 242-260.
- 渡辺京二(1998) : 『逝きし世の面影』, 葦書房, 487p.+VI
- Baker, F.J. (1896) : *The story of The Woman's Foreign Missionary Society of The Methodist Episcopal Church, 1869-1895*. Cranston & Curts, Cincinnati, 435p.
- Brumberg, J.J. (1982) : Zenanas and girlless villages: the ethnology of American evangelical women, 1870-1910. *The Journal of American History*, 69-2, 347-371.
- Domosh, M. (1991a) : Toward a feminist historiography of geography. *Transactions of the Institute of British Geographers*, 16, 95-104.
- Domosh, M. (1991b) : Beyond the frontiers of geographical knowledge. *Transactions of the Institute of British Geographers*, 16, 488-490.
- Hill, P.R. (1981) : Heathen Women's Friends: The roll of Methodist Episcopal Women in the women's foreign mission movement, 1869-1915. *Methodist History* 19-3, 146-154.
- Keller, R.S. (1980) : Creating a sphere for women in the church: How consequential an accommodation?. *Methodist History* 18-2, 83-94.
- Keller, R.S. (1981) : Lay women in the protestant tradition. In *Women & Religion in America. Vol. 1: The Nineteenth Century*. eds. Ruether, R.R. & Keller, R.S., 242-293. San Francisco: Harper & Row, Publishers.
- Mott, F.L. (1938) : *A history of American magazines, 1865-1885*. Harvard University Press, Cambridge, 649p.
- Stoddart, D.R. (1991) : Do we need a feminist historiography of geography — and if we do, what should it be?. *Transactions of the Institute of British Geographers*, 16, 484-487.